

新しい社会に対応できる人材の育成・明星教育センターの活動の広がり

10 周年を超えて： これからの明星教育センターの役割と在り方について

西 本 剛 己*

2019年4月に、2年の任期で明星教育センター長に就任した。デザイン学科教員との兼職だが、任命された時にまず戸惑ったのは、改めて考えると自分が明星教育センターについてほとんど何も分かっていないことだった。前任の菊地滋夫先生から引き継ぎを受けた際に、このセンターは明星大学の「教育センター」なのではなく「明星教育」を発信するセンターなのだというご説明を聞いて、「そうだったのか」と驚いてしまったレベルなのだから話にならない。しかし多くの学部学科教員も同じなのではないだろうか。それぞれの学科の運営で手一杯なこともあるが、私がデザイン学部長を務めていた時ですら明星教育センターの情報はほとんど伝わって来なかった。だからとにかく中に入ったら、センターの教職員にいろいろ教わるしかないだろうし、まあ余計な心配などしなくとも、全てはすでにきちんと出来上がっているのだろうと思っていた。

ところがそうではなかった。確かに教職員は一体となって常にミーティングを重ね、粛々と仕事をこなしていた。しかし教員の一人一人と個別に面談をしてみると、みんながどこか迷い、閉塞感のようなものを感じていたり、その打開に諦めの意識すら持っていることを知った。センターの実情は、ありとあらゆる点で私の当初のイメージとかけ離れていた。やがてその様々な理由が分かるようになったが、おそらく最大の原因は、明星教育センターの担当する授業科目が、設立以降、継ぎ足されるように増えていき、体系化が困難になっていったことにある。普通新しい学部学科を開設する時には、まずゴールとしてのディプロマポリシーを決め、そこから逆算するようにカリキュラムを組み立てる。ところがセンターの科目の場合、個々の教案は組み立てられても、全体としてのゴール自体が設定しづらい。学科ではないから入学者を選別することも出来ないし、同じ学生たちを4年間教え子として導けるわけでもない。要するに手塩にかけたくてもかけようのない現実がある。そのため、本来なら明星教育を象徴するはずの「自立と体験」にしても、その目指すべき道の方向が分からなくなりかけていた。しかも、センターの情報が学部学科に伝わってこないのと同じように、センターの教職員がいくら努力しても、学内からは反響がほとんど伝わってこない。10年を経過して、改めて「自立と体験」とは何なのか、いやそもそも「明星教育センター」の存在意義とは何なのかを問い直さなければならない時期に来ており、実際に2019年度は、その議題でみんなで悩み、討議し、苦しみ、迷い続けたといってもいい。

しかしその一方で、徐々に私自身がセンターに対して、多くの可能性を感じるようになった。第一にそれは、個別面談を通して知った、各教員のキャリアの驚くべき多様性だ。決して単なる教育工学の専門家集団ではなかった。明星大学に来る前にたどって来た道のり、経験値がまるで違う。現在のカリキュラムと教案では、どうしても同じ授業を複数名で分担し、足並みを揃える必要があるから、教員一人一人の個性や専門性を発揮することは難しい。しかしそれだけでは余りにもったいない。同じ授業内容を分担するだけでなく、本当の分担、つまりそれぞれの独自のキャリアを反映させた異なる内容を受け持つような科目立てを併せ持てれば、教員にとっては授業のやり甲斐も増すだろうし、内容のバリエーションが豊かになることは何しろ学生

* 明星教育センター長

にとって選択肢が広がる。同じことのできる学生を再生産するだけでは、これからの大学も社会も立ち行かない。自分らしさを十全に発揮しながら新しい社会に対応できる人材を育てるためには、個々の学生が自分の存在を肯定してくれそうな場所を発見できるだけの授業内容の多様性が問われるはずだし、そのためにはまず教員自身が画一的な状況を脱して見せなければならない。教員が圧倒的な自己肯定感を持って生き生きしていれば、学生は必ずそれに憧れ、授業の内容を超えて、「そのような人間になりたい」と、自らその方法を考え始めるだろう。そしてすでにセンターの教員は、明星学苑が100周年を迎える2023年度に向けて、そうした可能性の模索を開始している。

そして何より大きいのは今年度、落合新学長から大学新構想として、「セントラル」と「クロッシング」というスタンスが明確に打ち出されたことだ。特定分野の専門性を育む「セントラルの拠点」としての各学部学科に対して、「クロッシングの拠点」となり得るのは明星教育センター以外にない。もちろん今後、学部学科のクロッシングも必要だし、すでに学科によって地域とのクロッシングなどの実績も数多くあるが、学部学科にセントラルという絶対的な命題がある以上、クロッシングの幅は限られる。それに対して明星教育センターには、そうした意味での縛りは無い。何より全学部の1年生が履修する「自立と体験1」を始め、明星教育センターの科目の全てはすでに常にクロッシングであった。他の全学共通教育科目も複数の学部の学生たちが履修するが、やはりその科目ごとの専門性が発生する。しかしクロッシングの種類はおそらく無数にあり、学生たちもそうした交流が増えることを強く望んでいる。明星教育センターは、明星教育センターだからこそ可能なクロッシングを様々考えられるだろうし、もしかしたら授業を超えて、明星教育センター自体を、学長の新構想に掲げられている「サードプレイス」的な場にできるかもしれない。今、「クロッシング」をキーワードと位置づけ、その拠点を担う場としての新たな明星教育センターのあり方についても検討が始まっている。

学部学科間のクロッシングについても、バラバラにやって行くようでは駄目だろうし、私の所属するデザイン学部でも、学部横断型の新しい科目の構想はあるのだが、他学部にどのようにアプローチして行けばいいのかわからず、実は戸惑っている。そこで明星教育センターが新たにその活動の幅を広げ、そのコーディネートやマネジメント、つまり学部学科同士を繋ぐ役割を担うことができれば、1キャンパスに集う総合大学の強みを、最大限に活かせるようになるのではないだろうか。上述したように、明星教育センターのこれまでの活動が、その努力の割に学内からの評価を受けていないことに教員たちは苦しんで来た。しかしその原因の一端は、センター自身にもあり、センターの科目も結局のところ、そこだけで閉じられた、自己完結した授業になっていたのではないだろうか。これまでの明星教育センターの科目や活動は、学生には開かれていたが、学部学科にはあまり開かれてはいなかった。学生同士はその授業の中で「Do It with Others」をしていたがこれからは明星教育センターが「Do It with Others」を促進することで、その存在や活動の意義についてごく自然に評価を受ける、そういうフェーズへと転換すべき地点に来たのではないだろうか。「クロッシング」とは定義によって、閉じないこと、自己完結してしまわないことを意味する。その道を明星教育センター自らが切り開くことが今求められている。そしてそれが明星大学全体の価値向上へと続くことは間違いない。

この紀要が出る頃、センター長としての任期は終わりを迎えるが、この2年間の経験は私にとって大きかったし、むしろこれからの時代にこそ必要な、無限の可能性とチャンスがあることを、明星教育センターに対して感じる。学部学科と明星教育センターとが縦糸と横糸のような関係で、よりダイナミックで美しいテキスタイルを紡ぐことこそが、明星大学の独自性に繋がるはずだし、センター自らが、それを可能にする機織り機の製造元となった時に、初めて本当の「明星教育のセンター」が生まれると、私は確信している。